

メリッサ——初めての玉潰し *Melissa by Ned*



私はステレオタイプな股間責めなんて信じてない。なんだか儀式化されすぎていて不自然だ。鞭、ベルト、留め金、ゴム紐……大仰すぎる。面倒くさいとかそういうことじゃない。ステレオタイプな股間責めについて書かれた文書は、ペニス（や男）の威厳をかえって高め、自然な拷問の価値を半減させる。間違いない、それらの書を読んだ男たちは、かえって優越感にひたれるのだ。私はそんなことを書きたくない。もし男たちが、私もそのような拷問器具を必要としているなんて馬鹿な考えを持ったとしたら、もう脱力するしかない。私にはそんなものいらぬ。私は、男の股間を責める拷問のすべての実例を検討する気はない。拷問とは、苦痛によって誰かに影響を与えることであり、純粹にそれを楽しむ行為だ。ときに女性は男の生殖器を攻撃する、護身のために、あるいはアクシデントで。私の例を示そう。

私が十三歳のときのことだ。私は同じ年齢の女の子たちに比べて早熟だった。私の乳房は急速に膨らみ、女性らしい胸を引き立たせる細いボディを持っていた。同じ年齢の男の子たちは、私の早熟さに、野蛮な性欲をかきたてられていた。

三人の男の子のグループがいた。三人そろって醜男で、よく私をからかった。彼らは私と同じ通りに住んでいて、学校の帰りは同じバスに乗り、同じバス停で下りた。そこから家に向かうま

での間は、まさに地獄だった。

事の起こりは、三人のなかの一人、トミーという男の子が、私に唇で淫らな仕草をして見せたことだった。それに対して私は何かいった。具体的には覚えていないのだが、ようするに、彼の性的な不安感はずいぶん小さく由来している、といったことだ。トミーは真っ青になった。彼の友人たちは黙りこんだ。

彼の顔面に血がのぼり、突然私に襲いかかり、私の背中を木に押しつけ、平手打ちを食わせた。左右に一発ずつ食らった。

私は、目に涙が溢れるのを感じた。頬がひりひり痛んだ。頭のなかが混乱し、現実感が失われた。悪夢だった。私は、次に彼が何をしてくるか、怖くなった。アドレナリンが全身を駆けめぐり、体は麻痺したように動かなかった。

次に起こったのは最悪の事態だった。トミーは私の顔に唾つばをはきかけた。そして彼は私の乳房に手を伸ばし、強くつかんだ。

「どうだ、おまんこ、どんな気分だ。濡れてきたか？」

私は叫んだ。もう少しで泣きそうになった。彼は、愉しんでいた。

「おい、濡れてるかって聞いているんだ。俺のちんぼが欲しいか、え？ してほしいと言え」

彼は私の唇に人差し指をつっこんだ。突っ込んだり引き抜いたりした。そのとき、私はおののいていた。じつと我慢していた。もし、トミーがそれ以上のことをしなかつたら、私は彼が立ち

去るがままにし、そのことを誰にも言わずにいただろう。

しかし、彼はそれ以上のことをやった。

彼は片手で私の唇を弄もてあそびながら、もう一つの手を私のスカートの下に滑り込ませた。

すべて夢のなかのようだった。私の反応は、まったく予期しないことだった。私は彼の手を振り払い、素早く前に出て、彼の股間に思い切り私の膝を叩きつけたのだ。

彼は地面にくずおれ、悲しげな悲鳴をあげ、両手で男性の象徴を押さえた。私はしばしば彼を見つめ、ただ怒りに任せて、さらに彼を蹴りつけた。彼が睾丸を庇っている手を、彼の胸を、肛門を蹴った。彼は泣き声をあげたが、私の怒りはおさまらなかつた。私は彼の顔を蹴り始めた。

この間、立ちすくんでいた二人のうちの一人が、彼を守るために走り寄った。何か言いながら私を追い払おうとした。そいつ、多分ジェフという名前だった。私は彼に飛び蹴りを食わせた。爪先が彼の両脚の間に食い込んだ。彼もがっくりと地面に倒れた。三人のうち二人が、睾丸を壊されたことを後悔しながら草の中にはいつくばったのだ。ジェフはうつぶせにうずくまって尻を突き出していた。私はその肛門を思い切り蹴った。彼は意味のない言葉で悲鳴をあげた。私はさらにダメージを与えた。

ふと気がつくくと、もう一人の男の子、トニーの姿がなかった。逃げたらしい。勇敢な仲間だこと！

私は、取り残された男の子たちをいたぶった。私がトミーの頭を蹴ろうとすると、ジェフがな

かに割って入り、自分の頭を蹴られてしまった。その一撃で彼はノックアウト。さらに私はトニーのみぞおちを強く踏みつけた。彼は呼吸困難に陥った。すでにくたくたになった彼を仰向けにし、その顔面にまたがり、顔を彼の股間に向け、両脚を広げた。抵抗したら殺すぞ、と脅し、彼のズボンのベルトをはずし、トランクスをずりさげ、男性の象徴をあらわにした。

彼のペニスは一〇センチくらいで、弱々しく、皮をかぶったままだった。陰囊はだらしなく垂れ下がっていた。私は左手で、彼の亀頭をおおった包皮を剥き、亀頭を強く握り、ペニスを引く張った。そして右手を振り上げ、ハンマーのように彼の睾丸がけて振り下ろした。彼の両足が突っ張り、体が痙攣した。

彼は、危険にさらされた男の象徴を手で覆った。私の股間の下で、彼の顔が絶望的なうめき声をあげた。私は、黙っていないと喉をかき切るよ、と威嚇した。私は彼のペニスを強く引く張りを、彼の腹を何度か殴りつけ、手をどける、と命じた。彼が陰囊から手を離すと、もう一度、彼の睾丸に拳を叩きつけた。これを何度か繰り返した。それはチャーリー・ブラウンからボールを奪うルーシーのようだった。彼を投げ飛ばし地面に叩きつけるようなものだった。それは、私には女と男の関係のエッセンスの象徴のように思えた。

トミーを痛めつけるのをやめたとき、私を奇妙な衝動が襲った。私は自分のクリトリスを彼のペニスに押しつけた。私はオルガズムを感じた。

これで終わり、ではない。

おわかりだろう。私はトニーを許さなかった。彼は、彼の友人が私をいたぶっているのを止めるべきだった。彼は何もしなかった。そしてその報いを受けた。

学校で彼を見かけない日はなかった。だが、私はむやみに彼につつかかったりはしなかった。理想的な復讐の機会を待った。やがてそのときが訪れた。

ある日、授業が終わった後も私は友人達と校舎のなかにいた。ふと、トニーが男子用トイレに走って行くのが見えた。私は他の生徒が外に出るまで待ち、トニーが入っていったトイレに忍び込んだ。

彼は、壁に向かって立っていた。彼はまだズボンのジッパーを上げていなかった。これは私にとって幸運だった。私は彼の背後に忍び寄り、後ろから彼の睾丸をつかんだ。

「私よ、おぼえてる？」

「メ、メリッサ！ よ、よせ。やめる」

私は力をこめて睾丸を握りしめ、爪を深く食い込ませた。私は彼の大きく固い睾丸を痛めつけることに快感を感じている自分に気づいた。

「やめろってなぜ？」

私は彼の陰囊を上下に揺すぶった。トニーが泣きはじめた。私は壁にむけて突き飛ばした。彼はよろめき、壁に背中をぶつけた。私はすぐさま駆け寄り、彼の股間を膝で蹴り上げた。彼はくずおれ、泣きわめいた。両手で股間を押さえ、頬を床に押しつけていた。彼のわめき声に気づい

た誰かが入ってくるまでに、ことを終えていなければならぬ。私は素早く動いた。

私は彼の背後に周り、彼のズボンとトランクスをずり下げた。ボールペンを取り出して彼の肛門に突き刺した。男の子にとって、当時の私が思いついた限りでは、充分すぎる拷問だった。

私は、最後に彼の睾丸を握り潰し、もはやぼろぼろの肉塊となった彼を床に放ったまま、立ち去った。トイレのドアを開け、彼のほうに振り返り、親しい友人に挨拶するように、こう言った。

「じゃあね、トニー」